



## 『関西企業ヒストリア』

～その強さの秘密・転換点を探る～

創業から70年以上の歴史を重ねる会員企業を取りあげ、時代の荒波を乗り越えて、長い期間にわたって生き残り成長してきた強さの秘密、その歴史の転換点を探ります。

### 第44回 創業 1937年(昭和12年)

## 扶桑薬品工業 株式会社

### 大和商会の創業

**1937年**▶ 扶桑薬品工業の前身である大和商会は1937年3月25日、現在の大丸百貨店を東に少し入った大阪市南区鰻谷中之町(現:大阪市中央区)に戸田幸平と林原次郎の二人の岡山県人によって設立されました。



左: 戸田幸平 右: 林原次郎

当時の大和商会は間口二間の小さな会社で、たった一台のリヤカーを輸送手段に、国産化が始まったばかりのブドウ糖を菓子業界に販売していました。しかし、創業間もなく林原は家業のため岡山へ帰郷。さらに、1941年には太平洋戦争が勃発し、戦争が激しさを増すごとに大和商会の状況も厳しくなりました。



創業時の大和商会

### メーカーへの業態変更、 扶桑薬品工業の発足

**1942年**▶ 政府による経済統制で販路が狭められ

るなか、戸田は販売会社からメーカーへの業態変更に活路を求めました。1942年にブドウ糖が一元配給統制になったことを受け、ブドウ糖を原料とする注射液の製造へと転換を図ります。そして、これを機に社名を「扶桑産業株式会社」に改称しました。「扶桑」とは「大和」と同じく日本の別名です。「扶桑」の言葉には日本から世界へ貢献する想いが込められています。



今里工場

その翌年、1943年に医薬品製造への道を歩み始める第一歩として東成区東今里に今里工場を竣工し、ブドウ糖を原料とする注射剤の製造を開始しましたが、今里工場が軌道に乗り始めた矢先の1945年3月、大阪大空襲で鰻谷の本社を焼失し、1948年4月には戦中戦後を支えた今里工場が隣で起こった火事により全焼しました。しかし、幸いにも増産用に今里工場の向かいに取得していた今里第二工場にて、半年後には生産を再開することができました。



今里第二工場

たび重なる苦境を乗り越え、戸田は医薬品製造に未来を賭けることを決意します。1949年、これを機に現在の「扶桑薬品工業株式会社」へと社名を改めました。



ここが  
転換点

## わが国初の透析液「人工腎臓灌流原液フソー」が薬価基準に収載

**1964年**▶ 1950年代になると、日本は戦後の不況から脱し、高度経済成長期を迎えます。1957年3月、さらなる発展を目指して今里工場の4倍の広さをもつ城東工場を竣工し、生産を始めました。1964年4月には京橋工場も竣工し、注射剤に加えて錠剤、カプセルなどの内容剤分野にも事業を拡張強化しました。



城東工場

順調に事業を拡大していくなか、透析療法が扶桑薬品工業に大きな転機をもたらします。1950年代、日本は透析療法の黎明期にあり、医療の現場では透析液の製造を研究する製薬メーカーを求めていました。研究者から透析液の開発を求められた戸田は、医療の発展に応えるべく、当時未知の領域であった透析液の開発を決意しました。

濃厚な液を作ることから始まった長年にわたる研究の末、1964年にわが国初の透析液「人工腎臓灌流原液フソー」が薬価基準に収載。製造承認が下りてから薬価基準に収載され販売が開始されるまでの数年間は、救える命を見ることができず、病院の要請に応じて透析液を無償提供し続けていました。



人工腎臓灌流原液フソー

## 躍進の時代

**1968年**▶ 当時の最先端の技術で、地上7階、地下2階の城東第一注射剤工場を竣工しました。また、当時まだ珍しいエコへの取り組みとして、城東工場北側にかつてあった大阪市清掃局森之宮工場と余熱利用の蒸気導入協定

を締結し、工場の無煙化を実現しました。そしてこの年、創立34年目にして、大阪証券取引市場第二部に上場することができ、社員一同が喜びに溢れました。



式典でスピーチする戸田幸平氏

1977年、創立40周年を迎える頃には、鰻谷で生まれた小さな会社は従業員1,000名の企業に成長していました。記念式典で戸田幸平はさらなる発展を誓いましたが、40周年の喜びから1年足らずの1978年12月、社長の戸田幸平が68歳で永眠しました。新たな構想である岡山工場計画途上の出来事でした。

1979年2月、前社長の想いを引き継ぎ、戸田幹雄が社長に就任し、事業発展を加速させます。同年、地上5階建ての城東第二注射剤工場を竣工し、輸液増産に貢献しました。また、生駒山麓に大東工場を竣工し、京橋工場で生産していた内用剤部門を移転しました。大東工場は従来の京橋工場の約4倍の広さを誇り、錠剤など内用剤の生産体制も拡充させました。

1981年には、城東工場北側に研究開発センターを竣工し、バイオ技術など新しい医療ニーズに対応するより良き医薬の創出、創薬を目指した研究開発拠点として分散していた研究施設を統合しました。

さらに、1985年には50,000㎡の敷地を最新鋭の技術で満たした戸田幸平前社長念願の岡山工場を竣工しました。扶桑薬品工業の主力製品は透析剤や輸液などであり、医療の現場において欠かすことは許されません。岡山工場は全国に安定供給を行う社会的使命を果たすための西日本における生産拠点の役割を現在においてもなお担っています。



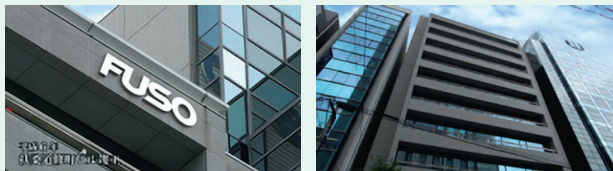
研究開発センター



岡山工場

1987年、「おかげさまで半世紀」をテーマに創立50周年の記念式典を盛大に開催しました。1989年には東京証券取引市場第一部に上場しました。創業から52年目、ついに念願が叶った瞬間です。

また、1994年、薬の街として名高い大阪市中央区道修町に扶桑道修町ビルを竣工しました。1952年、道修町で細長い37坪の貸事務所から営業を始めて以来42年、ようやく本社所在地275坪に自社ビルを持つことが叶いました。



道修町の本社ビル

## 安定供給のために

**1995年▶** 1995年1月17日、阪神大震災が発生。私たち扶桑薬品工業は、物流状態が麻痺しているなか、「透析液の供給を欠かさず」を合言葉に、岡山工場から被災地の病院へ社員自ら輸送を行い、安定供給の使命を果たしたのです。



茨城工場

同年5月には茨城工場を竣工。茨城工場は岡山工場をもしのぐ大規模工場で、それまで西日本にしか供給拠点がなかった扶桑薬品工業にとって、かねてからの念願であった東日本から北海道をカバーする主力製品の生産・供給拠点でした。この工場の完成で、城東、岡山、茨城、大東の工場と全国12の配送センターのネットワークによる分散型生産供給システムが完成し、関東以北への製品供給は一層安定的なものとなり、その後発生した大規模災害において、いかにその能力を発揮し、扶桑薬品工業の信頼性を高めました。



東京日本橋の扶桑日本橋ビル

1997年、扶桑薬品工業は創立60年を迎え、2001年には、江戸時代より薬種問屋の集う東京日本橋本町に扶桑日本橋ビルを設立。東京第一支店と東京事務所を移転し、東日本エリアの新たな拠点となりました。東の薬の街、日本橋本町の自社ビルは大阪道修町へのビル建設同様、扶桑薬品工業にとって長年の夢が実ったことを意味します。

2011年3月11日、東日本大震災が発生。茨城工場では社員や建屋に大きな被害はなかったものの、物流棟に保管してあった製品・原料が地震の激しい揺れのために崩落し、物流棟の機能が失われてしまいました。しかし、余震の続くなか、復旧作業の安全監視や清掃などに茨城工場の全社員が取り組み、早期の復旧を成し遂げます。そして、2016年4月、茨城工場敷地内に6階建、国内最大級の高さ5.5mの混合機3台を有する粉末の透析剤を製造する第二製剤棟を増設し、安定供給をさらに万全なものとなりました。

## 扶桑薬品工業のこれから

**2023年▶** 間口二間の小さな会社から始まった扶桑薬品工業は80年以上の歳月を経て、4つの生産拠点と12の流通拠点、1,300名を超える従業員を抱える企業へと成長しました。ブドウ糖注射剤を製薬業のスタートとした扶桑薬品工業は、透析剤、輸液を主力製品として「生命(いのち)支えて」を理念に、医療に欠かすことができない基礎的医薬品の開発に取り組んできました。そして、2000年からは不妊治療関連製品の開発にも取り組んでおり、2017年には本格的に生殖補助医療（ART）分野に進出しました。



社員に訓示を述べる戸田幹雄社長

今後は「生命(いのち)支えて、生命(いのち)育む」を新たな理念とし、輸液、透析剤、不妊治療関連製品などの開発に取り組んでいきます。

### 扶桑薬品工業 株式会社

本社所在地：大阪市中央区道修町1丁目7番10号  
従業員数：1,314名（令和5年3月末現在） 資本金：107億5,820万円  
事業内容：医療用医薬品等（人工腎臓用透析用剤、前立腺疾患治療剤、不妊治療関連製品）の製造販売